

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校が建つ旧都南地区南部北上川流域に近い地域では、これまでも集中豪雨による冠水や浸水被害の多い地域である。また、水田が多いため地盤が軟らかく地震発生の際は大きく揺れる。加えて東日本大震災津波より本校では「内陸に住む私たちにも沿岸地域のために何かしたい。微力だが無力ではない」という機運が高まり、毎年沿岸地域へのボランティア活動に取り組み、震災から学ぶ命の大切さを学んできた。このように、本校では浸水被害と地震、さらには地震から発生した火災に備えた取組みに特化して活動してきた。

以上のことから、特に水害と震災について本校活動のスローガンである「つづける・つなげる・つたえる」をさらに深めながら、防災教育を中心にキャリア教育と復興教育を絡めながら地域での災害復興リーダーの育成と地域間での絆を深めることを目標に取り組んでいく。

II 取組の概要

1 防災教育

【ねらい】

有事の際に自分の命を守ることができる（自助）
とともに他者と協力して生きていくことができる（共助）の精神を養う。

【取組み】

（1）防災・避難訓練

全校による防災避難訓練。地震発生からの火災を想定して、はじめは机の下に身を隠し、その後校庭へ避難する訓練。口をハンカチで押さえながら逃げる訓練をした。その後消防署員の協力で消火器による消化訓練と避難袋を使った降下訓練を実施した。

（2）救護訓練

日本赤十字岩手県支部の皆さんに協力を仰ぎ、1学年はAEDを使った心肺蘇生訓練、2学年は三角巾を使った応急救護訓練、3学年は毛布を使った負傷者運搬作業訓練を実施した。生徒は周り協力しながら真剣に集中して取り組んでいた。

（3）総合防災訓練

拠点校として総合防災訓練に参加した。「土嚢設置訓練」や「簡易トイレ設置訓練」等、防災や被災時のための訓練を専門家から指導いただいた。これほど大規

模に行われる訓練もなかなか無く、様々な訓練から学んだことをそれぞれが持ち寄り全体として生かしていきたい。

また、アルファー米の試食実習や家庭科の協力で鍋による炊き出し実習を実施した。聞いた事はあっても初めて食べてみたり、やってみた生徒が多かったが、実習に積極的に取り組み、有事の際に日頃から訓練をして備えておかなければならないことの大切さを学んだ。

2 復興教育

【ねらい】

東日本大震災津波以後本校での「つづける・つなげる・つたえる」の精神のもと、その経験を今後の危機管理に活かし、命を守る態度を養うとともに、地域に関り、有事の際の復興防災リーダーの人材を育成する。

【取組み】

（1）1学年東日本大震災津波被災地見学

この被災地見学はこれまでも行われてきた活動ではあるが、今年度は事前に被災された方を招いて、講演会を行った。当時の写真を見せていただいたり、体験されたことをお話しいただいたりし、より真剣に震災による被災について考えることができた。また、見学の前には自分たちで東日本大震災について調べ、それを踏まえて見学を行うことができた。

初めて実際に沿岸を訪れる生徒も多く、今後の防災復興について意識を高めていた。レポートについては文化祭にて展示による発表を実施した。

（2）文化祭「南昌祭」での復興バザー

防災復興委員会によるバザーを実施した。商品については全校生徒及び各ご家庭に呼びかけて家庭で不要な物を出品していただいた。大変多くの商品が出品され、バザーも盛況だった。売上金11,340円は「SAVE IWATE」を通して県内の被災地に寄付させていただいた。また、バザーの会場となった教室では、上記にある1学年の被災地見学についてまとめた壁新聞を飾り、お互いの活動を盛り上げることができた。

（3）ボランティア活動

今回で4年目になる。岩手県釜石市鶴住居地区の児童館を本校の生徒が訪れ、一緒にゲームをしたり、遊んだり、昼食を食べたりして時間を過ごす活動をして

いる。本校は県内のスポーツ推進の拠点校として創立された学校のため、運動に自信を持っている生徒が多数在籍しており、その生徒の特性を活かして他者に役に立つことをしたいということから始まった。鶴住居児童館には実際に被災した児童や親を亡くした児童、未だに仮設住宅で暮らす児童が多い。そのような児童達とふれ合う事で復興についての考えや理解を深め、将来岩手の発展にリーダーとして貢献する人材を育てるとともに、被災地の皆さんと多く関わり、様々な交流を深めながら、あの大震災を風化させず後生に伝えて行くことを目指している。今回は1月に実施し、生徒たちが考えたゲームによる交流や、生徒たちが調理したカレーを児童達や職員の方々と一緒に食べる交流を行った。

今年度から児童館は新校舎に移った。新しく、そして以前よりも設備の整った環境となったが、釜石の町では今なおいたる所で重機が稼働していた。町の様子を見ることができたことも、生徒にとって非常に大きな経験となった。

Ⅲ 取組の成果と課題

(1) 成果

ア ここ数年継続して活動してきたことで、避難訓練や救護訓練、そしてボランティア活動が生徒にとって特別な行事ではなく、自分たちの仕事として捉えることができるようになり、生徒主体で工夫を凝らして自主的に活動できるように成長してくれた。

イ 同様に続けてきたことで、学校としても年間の学校行事として捉え、生徒が伸び伸びと防災復興教育を学習する環境が整いつつある。多くの保護者や職員の方々も協力的で大変応援して下さるようになった。

ウ お互いに助け合い分かち合う「共助」の精神をこちらから教えなくても生徒間で自然に養われた。また、コミュニケーションを深める機会にもつながり、全体の絆・結束が強まった。感情をすぐに表情に出してしまい周りを不快にしまうような生徒も他者を思いやることのできる生徒に成長してくれた。

エ 自主的に活動できる生徒が増えた。また、自分から他者に対してコミュニケーションをとろうとする生徒も増えた。

オ 生徒の中には、知識は未熟ながらも一生懸命やることで他者の役に立とうとする姿が見られるようになった。また、自分のやったことで他者が喜んでもらったことにより達成感や充実感、自信を身に付けることができ、日々の高校生活を意欲的に生活するための一助にすることができた。

カ 活動を通して復興防災について関心・意欲をもつ生徒が増え、地域の発展や有事の際のリーダーとして貢献できる人材の育成に寄与することができた。

キ ボランティア活動に参加した生徒の多くは、将来の進路希望を教育関係の仕事に就きたいと考えている生徒が多かったが、参加した生徒の事後アンケートでは「来年も来たい」、「子供達から元気もらった」、「今回得た事を将来の仕事に活かしていきたい」という声が多く寄せられた。生徒達は、慣れない交流にも関わらず、子供達と一生懸命に関わり喜ばせようと頑張ることができた。その結果充実感を得る事ができた。活動を通して、他者への思いやりや分かち合うことの大切さ、何事も精一杯やれば相手に伝わること、そして相手が喜んでくれることの喜びなどを学ぶことができた。

(2) 課題

ア 熱心に、そして真剣に取り組むことを照れる生徒も若干おり、全員で一緒になって活動できるところまではまだ至っていない。命をつなぐ大切な備えであることを教えていくと共に、生徒本人にも気付かせる手立てを工夫していきたい。

イ 担当者の能力や知識、資質によって大きく活動に影響すると思われる。研修や訓練を多く積んで生徒に還元していくことが必要である。

ウ 生徒もまだまだ知らないことが多い。防災に関する学習教材で生徒がすぐに親しめるようなものがあれば活用したい。

エ 生徒の進路希望とうまくマッチングさせた指導をしていきたい。

オ 本校では復興教育に絡ませて防災教育に取り組んでいる。有事の際に防災リーダーとして地域に貢献出来る人材育成を目指しているので、「自助」・「共助」をバランス良く身に付けさせたい。しかし、「共助」の精神は養われつつあるが、「自助」の精神が少なく、まだ自分自身を守ろうという気持ちが少ない。結果、自分を守れないので他者を守るスキルも少ない。このあたりの力を防災教育・復興教育を通して身に付けさせたい。

カ ボランティアについては、当初の活動でポイントとしていたことと、現在のニーズは変わってきているように感じる。復興の状況を踏まえて活動にも変化を加えていく必要がある。

